

令和元年6月14日現在

機関番号：12701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K13009

研究課題名(和文) 忘れられた思想家J.M. ロバートソン：ヴィクトリア時代の合理主義的宗教批判

研究課題名(英文) J.M. Robertson as a Neglected Intellectual: Rationalistic Critique of Religion in the Victorian Age and After

研究代表者

有江 大介 (ARIE, Daisuke)

横浜国立大学・大学院国際社会科学研究院・名誉教授

研究者番号：40175980

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：第1に、近代以降のキリスト教批判の系譜の中にロバートソンを十分位置づけることができることを、彼の膨大な「自由思想」研究の内容から確認した。第2に、ロックの影響を受けた理神論第2世代から懐疑主義、合理主義的無神論ないし不可知論へのブリテン宗教批判の展開をロバートソンが的確に整理・評定したことを確認した。また、彼の知的活動が“ポピュラー・サイエンス”の先駆けであったことも確認した。第3に、ロバートソンによるロンドンのサウス・プレイス倫理協会での非宗教的道德啓発活動の概要を、同協会での複数回の資料調査とGoogle Ngramによるテキスト・マイニングの利用によってある程度明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的は、ヴィクトリア時代末期から20世紀初頭の時代に徹底した合理主義の立場から宗教批判の論陣を張り、ジャーナリストおよび学者として膨大な記事、評論、著作によって中産階級思想や宗教観に大きな影響を与えながら、その後ほとんど忘れられたJ.M. ロバートソン(1856-1933)を再発掘することであった。

このことは、我が国の古代から現代に至る西欧思想史・文化史研究における最大の弱点と言われているキリスト教をめぐる知性史的な葛藤について、19世紀から20世紀初頭のブリテンにおいてその欠落を埋めるという学術的な意義がある。また、現代の原理主義的な宗教葛藤について何らかの示唆を与え得る。

研究成果の概要(英文)：First, the research confirmed from the contents of Robertson's extensive "free thought" enquiry that he could be sufficiently positioned in the genealogy of the modern critique of Christianity. Second, it also confirmed that Robertson properly classified and rated the development of critique of Religion in Britain from John Lock, the second generation of Deism, scepticism to rationalistic atheism or agnosticism. It additionally confirmed that his intellectual activity was a precursor to contemporary "popular science". Thirdly, it outlined Robertson's non-religious moral development activities at the South Place Ethical Society in London to some extent through multiple resource surveys at the Society library and the use of text mining by Google Ngram Viewer and some other digital resources.

Although this research has many results that have not yet been published, I believe that it will eventually fill in the gaps in Robertson research not only in Japan but also in the United Kingdom.

研究分野：イギリス18-19世紀知性史

キーワード：キリスト教 合理主義 自由思想 不可知論 政教分離 ポピュラー・サイエンス ベンサム主義 ヴィクトリア時代

1. 研究開始当初の背景

デッカーズ(Odin Dekkers)による数少ないロバートソン研究のモノグラフ(J.M. Robertson: *Rationalist and Literary Critic*, Ashgate: Aldershot and Brookfield, 1998)への書評においてすら、ロバートソンは「重要な人物であった...にもかかわらず今日ではほとんど忘れられている」(*Victorian Studies*, 43(1), 2000, p.107)と評されている。ページ(Maritin Page)によるロバートソンの伝記的小品のタイトルでも *Britain's Unknown Genius: the Life-Work of J.M. Robertson* (South Place Ethical Society, 1984)である。言及される場合があっても、ほとんど19世紀の帝国主義批判の文脈において、J.A. ホブソンの同調者、友人としてである。典型的には、M. Taylor の雑誌論文「*Imperium et Libertas? Rethinking the radical Critique of Imperialism during the Nineteenth Century*」(*The Journal of Imperial and Commonwealth History*, Vol. 19, Issue 1, 1991, 1-23)が挙げられる。わが国では、やはりホブソンとの関連において、近年検討されることの多くなった福祉国家の理念と歴史の再検討の気運の中で、松永友有「リベラル・リフォームの経済思想: J.A. ホブソンと J.M. ロバートソン」(西沢保・小峰敦編著『創設期の厚生経済学と福祉国家』ミネルヴァ書房、2013年、所収)が数少ない例外的言及の一つである。

また、21世紀の英語圏での典型的な評価は『大英人名辞典』第2版(*Oxford Dictionary of National Biography*, 2004)のマイケル・フリーデン(Michael Freedon)執筆のエントリーによれば、ロバートソンは基本的には自由主義的政治思想家として概括されている。

しかし、ロバートソンが *History of Freethought in the Nineteenth Century* (1899) 以来繰り返し大部で浩瀚な著作によって世に問うていたのは、実は上掲の課題を主題としたものではない。ヴィクトリア時代の科学主義を体現する合理主義者として、一貫して主張し続けたのは宗教批判、キリスト教批判であった。本研究の開始当初は、ロバートソンへの関心が低く思想史研究の対象としては本国イギリスにおいてもほぼ忘れられた状況であった。

2. 研究の目的

ヴィクトリア時代後期から20世紀初頭を中心的に幅広く活躍した J.M. ロバートソン(John M. Robertson: 1856-1933)は、合理主義者、自由主義者、反宗教家、社会改良家、ジャーナリストとしての精力的な知的活動とその影響力に比して、現在はイギリスでもほとんど忘れられた存在である。本研究は、第一に、とりわけ言及されることの稀な、ロバートソンの宗教批判、キリスト教批判に着目し、それに深く関わる経済まで含めた彼の独特な社会認識のあり方を再発掘する。第二に、そのことを通じて、ヴィクトリア時代の合理主義とリベラリズムの系譜の中にロバートソンを正当に位置づけつつ、併せて、わが国のヴィクトリア時代研究の弱点である宗教的側面の探求に貢献することを目的としている。そして全体として、何よりも、忘れられた思想家であるロバートソンを、19世紀イギリス社会科学史や社会思想史の中に宗教批判の側面から正当に位置づけるという学術的な意義と特色があり、結果として得られる成果はわが国の当該分野の研究の弱点と欠落を埋めることを目指した。

3. 研究の方法

第一に、1,000点にも上るといふロバートソンの著作や記事のうちから当該課題に関わる主要業績をできるだけ選り出し、その主張の検討・再構成を試みた。第二に、限られているとはいえ、英語圏でのロバートソン研究を概観しその到達点を同時代以降の文献から確認した。第三に、British Library およびロバートソンが運営にもかかわったロンドンの Conway Hall Ethical Society (旧 South Place Ethical Society) 内の Humanist Library Archives を数次訪問し、所蔵の関連文献の発掘も目指した。以上を、年3 - 4回ほどの関連研究集会等での中間報告、関連報告および討論を通じて実践するという方法をとった。

4. 研究成果

第一に、ロバートソンの代表著作、記事、評論から研究課題に関するロバートソンの合理主義的宗教批判の言説の特色を確認できた。第二に、上記 Humanist Library Archives の未整理(uncatalogued)文献の中から、ロバートソンのベンサムへの予想以上の高い評価と功利主義的指向性を発見できた。第三に、ロバートソンの宗教批判の論理をロック、ヒューム以来の経験論的宗教(批判)論の系譜に位置づけつつ、それを手がかりに、第四に、その立場と現実の合理主義的啓蒙運動と政治経済的提言との相互関係を明らかにする手がかりを得た。

ただし、成果として刊行できたのは上記第三の成果に関連する、ロバートソンを直接論じる前段階にあたる、18世紀から19世紀ヴィクトリア時代中期までのイギリスにおける宗教批判の系譜を、ロバートソンに至る背景として整理した部分であった。残りは今後順次発表していく計画である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

1. 有江大介「Nicholas Phillipson はスコットランド啓蒙研究に何を残したのか：ECSSS 追悼パネルから見てきたもの」経済学史学会ニュース 53号、P22-24、査読無、2019年
2. Daisuke Arie “The Wrong but Influential Image of Adam Smith in the 20th century Japan: What the Adam Smith Library and Nitobe Suggest” 東京大学『経済学論集』82巻3号、P23-30、査読有、2019年
https://repository.dl.itc.utokyo.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=517
3. 有江大介「書評：エリー・アレヴィ、永井義雄訳『哲学的急進主義の研究』I, II, III (法政大学出版局)」イギリス哲学研究第41巻、P67-70、査読無、2018年
4. 有江大介「書評：ジャン・バルベラック、門亜樹子訳『道徳哲学史』(京都大学学術出版会、2017年)ピューリタニズム研究第12巻、P73-74、査読無、2018年
5. 有江大介「J.S.ミルのイエスとJ.H.ニューマンの神 ヴィクトリア時代知識人にとっての信仰とは」ヴィクトリア朝文化研究第14巻、P33-61、査読無、2017年
6. 有江大介「日本になぜキリスト教は広まらないのか？」ピューリタニズム研究第11巻、P2-9、査読無、2017年

〔学会発表〕(計11件)

1. 有江大介「寛容論をめぐるピューリタニズムとイスラームとの対話 歴史と現代 : 趣旨説明と狙い」日本ピューリタニズム学会第13回研究大会、2018年
2. Daisuke Arie 「The Wrong but Influential Image of Adam Smith in the 20th century Japan: What the Adam Smith Library and the Nitobe Suggest」経済学史学会第82回全国大会、2018年
3. 有江大介「門 亜樹子訳・バルベラック著『道徳哲学史序説』(京都大学学術出版会、2017; 原著4版1729; 原著フランス語版初版1706)について」社会思想史学会第43回大会、2018年
4. 有江大介「S.フライシャッカー『分配的正義の歴史』について」経済学史学会関東部会例会、2017年
5. 有江大介「シンポジウム：社会思想史における宗教」社会思想史学会第42回大会、2017年
6. 有江大介「S.フライシャッカー/中井大介訳『分配的正義の歴史』(晃洋書房、2017年)について」関西近代経済学研究会例会、2017年
7. 有江大介「功利主義研究の現状 『功利主義と公共性』(仮)の出版計画に寄せて」功利主義と公共性 功利主義はどこまで有効か?:法と経済と科学、2016年
8. Daisuke Arie 「Jonathan Edwards 's Critique of 'the deceitful feeling of liberty' expressed by Lord Kames in 1751」International Conference on Jonathan Edwards 2016 (国際学会) 2016年
9. 有江大介「日本になぜキリスト教は広まらないのか？」日本ピューリタニズム学会第11回研究大会・総会(招待講演) 2016年
10. Daisuke Arie 「What is Mill 's 'religion of hope' in his third essay of Three Essays of Religion?」The 14th Conference of the International Society for Utilitarian Studies (国際学会) 2016年
11. 有江大介「J.S.ミルのイエスとJ.H.ニューマンの神」日本ヴィクトリア朝文化研究学会第15回全国大会、2015年

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2)研究協力者

研究協力者氏名: 松永 友有

ローマ字氏名：(MATSUNAGA, tomoari)

研究協力者氏名：小畑 俊太郎

ローマ字氏名：(OBATA, shuntaro)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。